

【野菜】の【長雨・日照不足】対策について

<通年>

宮崎県総合農業試験場専門技術センター

【野菜全般】

(1) 予想される被害状況

- ①ほ場が滞水すると、根の活性が低下し、果菜類は果実の肥大不良が起こり、根菜類は裂根が発生。
- ②病害の多発。

(2) 事前・事後対策

- ①排水対策を徹底し、畝間の通路に土がたまって水が流れにくくなっているほ場では、土を畝に上げてスムーズに水が流れるようにする。
※鍬を使って土を上げる場合、ほ場内から排水口に向かって作業をするとかかなり深く掘らないとうまく傾斜がつかないので、排水口からほ場内に向かって土を上げていくと、楽に傾斜をつけることができる。
- ②病害対策として雨間をみて薬剤散布。
- ③曇天が続いた後の晴れ日は焼けが発生しやすいため、雨よけや半促成栽培などでは、早めの換気と灌水を実施する。

【果菜類共通】

(1) 事前・事後対策

- ①排水溝の点検を行うなど、ほ場内の排水に努める。
- ②果実の若どりや摘果（花）を行い、草勢の回復を図る。
また、過繁茂した茎葉は間引きせん定を行い、下葉や病葉を除去して通風をよくするなどして地上部の負担をできるだけ軽減する。
- ③根が衰弱し養分吸収機能が低下すると、肥切れ状態や微量要素欠乏を起こしやすくなるので草勢の回復を図るため、必要に応じて尿素（0.5%液）や葉面散布剤を散布する。
- ④病害の多発が予想されるので、病害の早期防除に努める。
施設野菜では、ハウス内が過湿にならないよう換気に努める。
- ⑤施設等で育苗中の野菜は、軟弱徒長とならないように、天候に応じて灌水（量・間隔）を加減する。
- ⑥ほ場準備を土壌が過湿状態で行うと、播種・定植後の生育不良を招きやすいため、ほ場が乾燥して土壌水分が適湿となってから行う。

1 【きゅうり（露地）】

（1）予想される被害状況

- ①日照不足による着果不良、花おち、生理落果の増加。
- ②灰色かび病などの病害発生。
- ③急に天候が回復すると、葉やけや果実に日焼けなどの障害が発生するとともに、地上部と地下部の生育バランスが崩れているため、しおれが発生しやすくなる。

（2）事前・事後対策

- ①曲がり果などは早めに取り除き、着果負担が過重にならないようにする。
- ②マルチを展張することにより、過剰な水分が畦に入らないようにする。
- ③畦間に湛水しないように排水対策を徹底する。
- ④草勢の低下により病害虫の発生が心配されるので、雨間を見て薬剤散布を実施する。
- ⑤天候が回復したら、病害虫防除と同時に液肥の葉面散布を実施する。

2 【ピーマン（雨よけ）】

（1）予想される被害状況

- ①日照不足による草勢の低下、白果の発生。
- ②落果等による収量・品質の低下。
- ③灰色かび病などの病害発生。
- ④高湿度のため蒸散が抑制され、果実に尻ぐされなど生理障害が発生。
- ⑤急に天候が回復すると、葉やけや果実に日焼けなどの障害が発生するとともに、地上部と地下部の生育バランスが崩れているため、しおれが発生しやすくなる。

（2）事前・事後対策

- ①ハウス外側の畝は外部からの雨水により土壌水分が多くなるが、ハウス中央の畝は乾燥状態となり樹勢低下となることもあるので、生育状況をよく確認し曇雨天時も中央畝を中心に灌水を継続する。
- ②追肥は1回当たりの施肥量を少なくし多回数での施用を心掛け、肥料の多量施用、特に窒素過多にならないように注意する。
- ③罹病果や葉、病害の発生源となる葉先枯症や花弁を残さないように徹底して取り除くとともに、適度な整枝による通気性確保を図る。
- ④発生前からの予防剤と発生後の治療剤の効果的な組み合わせにより、雨間の午前中を選んで徹底した防除を行う。
- ⑤草勢の低下により病害虫の発生が心配されるので、雨間を見て薬剤散布を実施する。
- ⑥天候が回復したら、病害虫防除と同時に液肥の葉面散布を実施する。

3 【トマト（夏秋）】

（1）予想される被害状況

- ①日照不足による草勢の低下。
- ②葉かび病などの病害発生。
- ③高湿度のため蒸散が抑制され、果実に尻ぐされなど生理障害が発生。
- ④急に天候が回復すると、葉やけや果実に日焼けなどの障害が発生するとともに、地上部と地下部の生育バランスが崩れているため、しおれが発生しやすくなる。
- ⑤長雨の影響で受粉昆虫の活動が低下すると、奇形果や空洞果など果実の品質低下を引き起こす。
- ⑥雨よけハウス内に水が浸入した場合は、急な水分変化による裂果の発生、青枯病などの土壌病害が蔓延する恐れがある。
- ⑦灰色かび病の発生が多くなる。

（2）事前・事後対策

- ①過剰な水分の除去と地下水位を下げるための排水対策を徹底する。
- ②ハウス外側の畝は外部からの雨水により土壌水分が多くなるが、ハウス中央の畝は乾燥状態となり樹勢低下となることもあるので、生育状況をよく確認し曇雨天時も中央畝を中心に灌水を継続する。
- ③追肥は1回当たりの施肥量を少なくし回数での施用を心掛け、肥料の多量施用、特に窒素過多にならないように注意する。
- ④栽培終期の場合、着果状況や樹勢に応じて収穫できる段数を決定し摘心を行う。【10月、11月】
- ⑤罹病果や葉、発生源となる葉先枯症や花卉を残さないように徹底して取り除くとともに、早めの下葉除去や適度な摘葉による通気性確保を図る
- ⑥発生前からの予防剤と発生後の治療剤の効果的な組み合わせにより、雨間の午前中を選んで徹底した防除を行う。
- ⑦草勢の低下により病害虫の発生が心配されるので、雨間を見て薬剤散布を実施する。
- ⑧天候が回復したら、病害虫防除と同時に液肥の葉面散布を実施する。

4 【にがうり（露地）】

（1）予想される被害状況

- ①日照不足による着果不良、花おち、生理落果の増加。
- ②急に天候が回復すると、葉やけや果実に日焼けなどの障害が発生するとともに、地上部と地下部の生育バランスが崩れているため、しおれが発生しやすくなる。

（2）事前・事後対策

- ①曲がり果などは早めに取り除き、交配数を制限し、着果負担が過重にならないようにする。
- ②草勢の低下により病害虫の発生が心配されるので、雨間を見て薬剤散布を実施する。
- ③天候が回復したら、病害虫防除と同時に液肥の葉面散布を実施する。

5 【いちご】

(1) 予想される被害状況

- ①育苗管理【5月、6月、7月、8月、9月】
 - ・軟弱徒長気味となりやすい。
 - ・多湿条件では、“炭そ病”の発生が懸念される。
- ②ほ場準備～定植期【8月、9月、10月】
 - ・地床育苗の場合、萎黄病、炭そ病の蔓延。

(2) 事前・事後対策

- ①育苗管理【5月、6月、7月、8月、9月】
 - ・遮光資材を外して（被覆せず）採光性をよくして、適切な肥培管理により苗の充実を図る。
 - ・炭そ病対策として定期的な予防並びに治療的な防除を実施する。
 - ・育苗環境の改善。
（雨よけ施設の設置、高設育苗、かん水方法の改善、通気の改善など）
 - ・うどんこ病等の発生も心配されるため、定植までの防除を徹底。
 - ・炭そ病については、発生を確認したら、早急に発病箇所周辺の株（1m以内）も同時に廃棄する。
- ②ほ場準備～定植期【8月、9月、10月】
 - ・排水溝をきるなど排水に努め、水の侵入にも備える。
 - ・仮の畝立てなどを実施し、なるべく早く乾くよう工夫する。
 - ・雨が長引く場合や乾きにくい時は、古ビニール等を活用して仮の被覆を行い、作業ができるよう環境づくりに努める。
 - ・定植の時期や苗の状態などから、基肥の量などを調節する。

【露地野菜類全般】

(1) 予想される被害状況

- ①日照不足による軟弱徒長。
- ②軟腐病、疫病、斑点細菌病等の蔓延。

(2) 事前・事後対策

- ①定期的な農薬散布。
- ②発病、感染源となる下葉や黄化葉は取り除いておく。
- ③日照不足時は薬害が出やすいので、農薬散布に当たっては使用基準の範囲で、できる限り低い濃度とする。
- ④感染源となる罹病葉や罹病株は速やかに撤去する。
- ⑤長雨による肥料流亡が考えられるので、早めの追肥や草勢回復のための葉面散布を行う。